

---

# 姉妹屋商会

山本眞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姉妹屋商会

### 【Nコード】

N7348C

### 【作者名】

山本眞

### 【あらすじ】

姉妹屋商会という変わった会社に入った、26歳の青年山本の日々のお話です。

## 1、姉妹屋にたどり着くまで（前書き）

稚拙な文章で、申し訳ありませんが、批評をいただいてどんどん成長していけたらうれしいです。

## 1、姉妹屋にたどり着くまで

### 1、姉妹屋商會にたどり着くまで

ども、山本眞と言います。初めまして。僕の会社「姉妹屋商會」の面々の話をしていきたいと思ひます。社長をはじめ、本当に個性の強い人ばかりの会社です。はじめは、僕も戸惑ひましたが、入つてみればなんと心地いい会社なんだろうと……。長く勤めてゐる人の氣持ちもわかつてきました。

あー、まず、僕の自己紹介をします。山本眞は、本名ではありません、せん、これも、おいおい話すこととなりますので、待つてくださいな。年は26歳です。A型です。彼女はいます。彼女は精神障害者で、なかなか仕事に就けません。でも、僕は彼女を愛してますし、振り回されるのにも慣れてきました。付き合つて2年です。趣味は・・・映画鑑賞でしょうか。好きな映画は「アマデウス」です。

僕が、「姉妹屋商會」に入社するきっかけから、話を始めましょうか。

僕の彼女、篠田かおりは精神障害者で、リストカット（通称リスカと言つてます）の常習者です。僕も何度か、仕事で呼び出されて病院に行つたりしました。まあ、派手に切つてくれますよ。ざつくりと。今は、収まっていますが、肘まで5ミリ間隔くらいで傷跡がびっしりです。

この彼女の両親が、また複雑でして、父親が不安神経症を最近発症しましてね。母親がもう、この父親の世話もあつて、目いっぱいなわけです。そうでなくても、彼女と母親の間には、深い確執があつて、僕も彼女の母親を信用するのはちよつと・・・。

そんなわけで、彼女の世話をしながら、仕事に就こうと、虫のいいことを考えていたんですよ。まあ、あるわけないですよ、そんな仕事。わかってはいましたが、どうしても最善の形を取ればと考えてしまい、頭では、

「そんなの理想に過ぎない」とか

「なにかを得ようとするなら、何かを捨てなければ」なんて考えていました。

（僕までおかしくなってしまったんだろうか？）

なんて、考えるのは毎日ありました。仕事が決まらなくて、ふと我に返ったとき、そんなことを思うのでした。

ある冬の日、何気なく歩いていた歩道。

頭上から子供たちの複数の声が聞こえてきました、見上げると、近くの保育園の園児たちでしょうか。お散歩の時間のようです。

（あー、歩道橋だー。園児たちが車見てはしゃいでる。かわいいなあ）

なんて、思っただけで見えていました。

歩道橋の脇の、雑居ビルらしき窓が、冬の陽を反射して、そのまぶしさに、視力が一瞬奪われました。

（どこの窓だろう？）

ちよつと、角度をずらして反射している窓の正体を見ようと思ったんです。

何階かわかりませんでしたけど、

『事務員募集』

と張り紙が。

僕は、走って歩道橋へ駆け上がりました。その張り紙を見るためです。

『フレックス、コアタイムなし、委細面談で』

（ええ〜。コアタイムなしってなにそれ。ヤバイ仕事？）  
なんて考えながらも、その事務所に行くことにしました。

雑居ビルの4階の角部屋でした。

「あの〜、事務員の件でお伺いしたくて来たのですが・・・。」  
事務員らしき女性が1人だけいました。割と広い事務所です。

「あら、そうでしたか。今、社長が不在でしてね。すぐにでも面接  
したいくらいなんですけど。えーと、どうしようかしら・・・。」  
物腰の柔らかい40代位の女性でした。

「あ、あの、今日は履歴書も持ってきていないので、後日でもいい  
でしょうか。」

「あ、そうね。そうしましょう。では、名刺をお渡ししておきます  
ので、ご都合の良い日をお知らせください」  
と、品の良い微笑が僕に返された。

「はい、では、早々にご連絡させていただきます。失礼します」

（ふあ〜。ドキドキした。飛込みってこんなに緊張するんだな）  
改めて、いただいた名刺を見た。

『姉妹屋商会』

（ん？面白い名前だけど、何屋さんだ??）

『総務 小山文子』

（うんうん、総務の人って感じの女性だった）

などと、自分を落ち着かせようと関係のないことまで思い起こして  
いた。

その足で履歴書を買ひ、写真を撮り、家で履歴書を書いていた。

（ん〜、特技ってなんだろう・・・）

特技って何え書きますか？

資格の記入は別の欄にありますよね？

（ん、誰かに聞いてみるってのも手だな）

決まらないので、かおりに電話してみた。

「あ、僕だけど・・・」

「あ、今日は割りと調子はいいよ。」

と明るい声。

「今、履歴書書いてね、『特技』って何書いたらいいのかわからなくて電話したんだよ」

「えー、こうちゃんの特技？」

「そうそう。なんかあるかなあ・・・」

「そうだなあ、面倒見がいいって事くらいしか思いつかないけど・・・」

「」

「そっか、じゃあ、それにしよう」

と、特技には

『面倒見が良い』

と書くことにした。

ありのままの僕の履歴書。どこまで通用するかも試してみたかった。

（おおーっし、書けた！電話しようつと）

呼び出し音が、回数が増えると不安になる僕。

5回目・・・

「はい、姉妹屋です。」

（この前の、小山さんの声みたいだ）

「あ、先日面接のお願いいたしました、山本耕治です。」

「ああー、あの大柄な男性ね？」

「はい、そうです。履歴書書きましたが、いつお伺いしたらよいの

かと電話しました。」

「ええと、ちよつと社長に都合を聞いてきますので、そのままお待ちください」

（保留音が、グリンスリーブスだ・・・これ好きなんだよねー）

「あ、お待たせいたしました。明日の午後はいかがですか？」

「はい、予定はないので何時でも構いませんが。」

「では・・・14時でお願いできますか？服装は普段着で来て頂きますか？」

「え？普段着ですか。」

「はい、堅苦しいのが社長は嫌いでしてね、ふふふ。」

「わかりました、では14時にお伺いいたします。」

「はい、お待ちしております。失礼いたします。」

ふーん、スーツじゃないんだ。小山さんは事務服だったなあ。社長さんってどんな人だろう・・・。「姉妹屋商会」ってぐらいだから、女性かもなあ。やり手の、キャリアウーマンみたいな人かなあ。

あ、面接のときの質問をまとめて書いておこう。

- 1、会社の業種
  - 2、勤務時間のこと
  - 3、僕の担当する職種
  - 4、休日
  - 5、お給料
  - 6、保険の関係
- このくらいかな。

さて、今回はこのくらいで、次回は面接のときの普通じゃない会話を紹介します。社長の・・・なんというか発想？の面白いこと。

姉妹屋は、あなたのそばにあるのかもしれないよ。  
では、また。

## 1、姉妹屋にたどり着くまで（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございました。続きも書いていきますので、お付き合いください。

## 面接です（前書き）

やっと社長に会えました。でもわずかなことしか感じ取れませんでした。まだまだ、社長やその他の面々、こなしている仕事の複雑さをもっとお話したいです。

## 面接です

### 2、面接です

ども、山本です。

いよいよ明日が面接です。今日は、かおりが作ってくれたパスタで夕食です。僕は独り暮らしで、よくかおりはここに食事を作りに来てくれます。かおりは、パスタを作るとき決まって人数分より1種類多い、つまり今日だと3種類のパスタを作ってくれます。これが僕はとても好きです。今日は、明太子のパスタと、カルボナーラ、ペペロンチーノになってます。

おいしく食べながら、明日の面接の話題になりました。

「ねーねー、こうちゃん。今度の面接の会社って、変わった名前だよねー。何屋さんだろうね？」

「そうだよな……。さっぱり検討がつかないや。」

「あやしい仕事だったらやめておいてね？」

「ああ、もちろんそのつもりだよ。でもさー、この会社の名前からすると、社長さんって女かな？」

「あー、そうかもお。姉妹屋なんてさー、ひょっとして宗教絡みだったりしたらやだねー。」

「そっち関係はお断りだな。」

なんて、お気楽な会話をしていました。

そう、かおりには宗教で痛い思いをしています。信じていた宗教があったのですが、やっぱり人間のすること。人間関係に嫌気がさして辞めたんです。でもその宗教の内容は、今でも正しいと思うているようで、時々その考えを元に決断を下したりしているようです。

来ました。面接当日。僕は朝から落ち着きません。なぜかと言う

と『普段着で来て下さい』の言葉。

（なーに着ていけばいいんだあ？）

今の時期だと、僕はジーンズに長袖Ｔシャツに上にトレーナーかパーカーです。外出するときには、ダウンを羽織るくらいです。

（こんなんでいいのかなあ・・・）

と、かおりが泊まるようになってから購入した姿見を見ながら、もう10分もうなっています・・・。

（どーしょー。かおりに電話するかなあ・・・）

でも、この時間はかおりは寝ています。例の精神疾患の症状なのですが、ホントに朝は弱いのです。と、言うよりも、ほとんど寝ています。そうだなー、12時間以上寝てるときなんてさらにあります。

（ま、しょうがない。何かつつこまれても『コレが僕の普段着です』でいこう）

あ、もうお昼です。遅刻するのは嫌なので、面接の会社の近くで昼食を摂る事にしました。これ、僕の性格で、心配性なんです。それに、姉妹屋商会を見つけたとき、あれは面接に行った帰りで、手ごたえがなくてトボトボ帰った日のことでした。だから、あまり詳しい場所を思えていない、というのがあります。

（ええーと、確か並木通りのファミマの所を歩いてて・・・）

辺りを見渡します。

（歩道橋があったよなー）

すると、前のときと同じ時間だったからかまた保育園児たちがお散歩しています。今は、保育園も変わりましたね。よく見ると、日本人以外の子供も混じっています。そして最後尾に、保育士さんが押す車椅子に乗った園児も。みんな楽しそうです。

（お、もしかして多分この子達に前も会ったんだろーな。それで運よく会社が見つかった！おおー、ラッキーかも）

と、僕お得意の勝手な縁起担ぎ。こういう前向きのものなら、いいと思いませんか？

（じゃなつくって、会社探さなきゃ・・・）

目の前に歩道橋が見えてきました。

（ん？あれかな？）

今日も、あの人同じで窓が冬の陽を浴びて光っています。

（よし、会社の所在地は確認したぞ。飯にしよう）

近くにあつた定食屋に入りました。サラリーマンやタクシーの運転手、OLがいっぱいいます。

（もしかして、ここはおいしいのか？この人の入りようを見ると・・・）

でも、さすが店員さん。さつさと片付け、板場さんもどんどん料理を出していきます。僕、こういう人間観察が大好きなんですよ。なんだかワクワクしませんか？

5分ほど待つと、席に案内されました。

「日替わりランチをお願いします」

そう、『日替わりランチ』がすきなんですよ。と、いうのはこういうので板さんの腕ってわかりそうな気がしませんか？

「今日は、白身の魚フライですが、いいですか？」

と、店員さんに聞かれ、

「はい、それをお願いします。」

待っている間、タバコを吸おうとしたのですが、ランチタイムは禁煙だそうです・・・喫煙者の肩身は狭くなるばかりです。

10分も待たないうちに、頼んだものが出てきました。

（早いなあー。慣れた人多いのかなー）

早速食べました。

（熱っ・・・）

揚げたてですから、熱いですよね・・・冷凍の白身魚じゃないです。おいしいです。

（あー、もし姉妹屋商会に勤めるようになったらここで昼飯食えるなー）

と、また僕の楽観的な考え・・・ホントにおいしくて満面の笑み

を浮かべてお勘定を支払いました。これで¥680なら安い！！  
（ここは、またかおりと一緒に来てもいいな）

まだ時間があります。ちょっと歩いてみることにしました。ウロウロしていると小さな公園がありました。公園と言っても、ブランコだけしかありませんでした。幸いベンチはあったので、腰掛けてタバコを吸っていました。もちろん、携帯灰皿は持っていますので、吸殻は持ち帰りますよ。

ボーっと冬の空を眺めていました。ちょっと雲が雪雲に近い感じ  
です。

（あー、雪が降るのかなあ。 かおり雪が好きなんだよねー）

タバコに陽は点けたものの、吸うことも忘れていつになく空を見て  
いました。

「ぐわっ！あっちー！！！」

やりました。根元まで火が来ているのにも気が付かず、空に見入っ  
ていました。時計を見ました。もうすぐ時間です。

「よっしゃー、行くかー」

と背伸びをして冷たい空気を胸いっぱい吸いました。

面接時間の5分前です。ここのビル5階建てなのにエレベーターが  
ないんです。4階まで上がったら、暑くなりました。

（おし、がんばろう！）

「こんにちはー。面接をお願いしていた山本と申します。  
とドアを開けていました。が、人の姿がない・・・。

「あのー、すみませーん」

と、奥の部屋から物音が。

「あー、ちょっとお待ちくださいねー」

（あ、小山さんの声だ）

「はい、ここで待ちます」

しばらく待つと、小山さんが顔を出して、

「寒かったでしょ？お茶とコーヒーどちらがいい？」

「じゃあ、コーヒーお願いします。あ、ブラックで・・・。」

やがて、コーヒーを2人分お盆にのせた小山さんが、

「こちらにどうぞ」

と、『会議室』と書いてある部屋に通された。

「どうぞ、お座りになって」

「はい！」

文字通り『会議室』な雰囲気のある部屋で、長机にパイプイス。壁にはホワイトボード。

「じゃあ、先に履歴書拝見させていただいていいですか？」

「はい、こちらです。お願いします」

小山さんは、学歴をサラッと見て、職歴について質問してきました。

「前のお仕事長く勤めてらしたのに、どうしてお辞めになったの？」

「いろいろ事情がありまして・・・。」

と、そこに

トントン、とノックする音が。

ガチャッと会議室を開けるドアの音。

「遅れてすまない、今戻った。」

（ん？社長さん？）

「あ、社長ー、今始めたばかりですよ」

と、振り返ってみると、ジーンズにパーカーを羽織った女性が居ました。

（小柄な人だな。30前後ってとこかな・・・。）

「山本さん、こちらが社長の『上野 凧』です。」

「よろしくお願いします」

すると、その小柄な体からは想像できない貫禄のある声で、

「ああ、かしこまらなくていいよ。こつちまで窮屈になるから」と。

髪の毛は黒くて、肩まである。ん？でも左は肩までであるが、右は胸の下まである。斜めに切ってあるようだ。骨太な感じで、化粧は

しているようだがあまり目立たない。香水の匂いだろうか、微かにする。でも、笑顔がない……。

（もしかして、怖い人？）

「社長、山本さんの履歴書です。先に拝見しました。」

「そうか。」

と、おもむろにタバコに火をつけ、小山さんの隣に座った。

「山本君も吸いたかったら遠慮なく吸ってくれていいんだよ」

「あ、はい。じゃあ。」

社長は、真剣に履歴書を見ている。

「ふむ。申し分ないな」

「ありがとうございます」

「で、だな、ここは変わった会社だな、本名を名乗らないのだ。というのも、別人になって働いてほしいのだ。プライベートと切り離すためにもな。」

「へー、変わっていますねー」

「うん、それでだ。山本君。君は苗字はそのまま良いが、下の名前変えることに抵抗はないか？」

「あ、はい。いいですが……。」

「うむ。では、君はとても誠実で真摯な印象を受けたので『真』としても良いだろうか？」

「なんだか、人が変わった気分になりますね」

「そうだろ？ そうやってうちの会社のものは仕事をしている。」

クスクス横で、小山さんが笑い出した。

「なんだ？ ブンさんよ」

「だって、社長は俳優の『山本耕史』さんが好きだから、同じ名前じゃいやなんじゃないですか？ ふふふ」

「いやいや、ここはみんな偽名だろ？ いいじゃないか」

「はいはい、わかりましたよ」

社長はくわえタバコで苦笑いしていた。

「ところで、社長、お伺いしたいのですが、業務内容なんです・  
・。」

「ああ、そうだよな。ここは、なんて言えばいいんだろう。困った人を助けてることが多いな。」

「NPOとかなんですか？」

「いや、そうではない。んー、例を挙げると、不登校の子供がどうやって将来を切り開くかのお手伝いをしたり、独居老人の方たちの話し相手や公的な支援の取り付けのために動いたりもする。一応、常駐の看護師がいてね、専属のドクターもいて往診にも行ってくれる。」

「ほー、すごいですね。」

「その後、その子供がうちの会社に入ることもある。今は3、4名いるかな？ブンさん」

「そうですね。クロアとハクアと、アリとオーとアユミくらいですかね」

「それで、僕のする仕事は何でしょうか？」

「そうだな、最初はブンさんの仕事を手伝ってくれ。それから、うちの奴らを紹介していくから、それに慣れてくれ。」

（慣れてくれ？ってなんか気になる）

「個性的な人間ばかりだな。次に出勤したらわかるぞ、その意味が。」

「山本さん、いつから働けますか？」

「んー、あの、フレックスの件なんですが・・。」

「ああ、あれはな、基本的に8時間働いてくれればいいんだよ。一応土日祝日は休みだが、出勤しても構わない。代休はしっかり取ってくれ。夜勤みたいな形態で働いている奴もいるから、心配しないでいいぞ。22時以降は、ちゃんと深夜手当もつく。」

「ほー、それは僕にとっては好都合です。例えば、1回抜けて戻ってきても構わないのですか？」

「ああ、構わないよ。」

「まあ、やっていくうちにわかると思いますからね。山本さんなら大丈夫でしょう。」

「で、眞はいつから勤められそうかな？」

「そうですねー、家の者と相談してきます。」

「ああ、気が向いたらいつでも来てくれ。ちなみに給料は、最初は、20万からだがいいか？」

「はい、昇給もあるってことですね？」

「そうだ。働いた結果が出ていれば惜しみなく出す。それが方針だ。仕事は楽しんでほしいと思っている。ただな、この会社は『歪な者』が集まっている。人間観察は好きか？」

「はい。今も社長のことを見て、『どんな方なのか』想像していました。」

「あははは。私の事は簡単にはわからないだろうな。な？ブンさん。」

「ええ、そうですね。」

（え？この小柄な人は、そんなにいろいろある人なのか？）

「わかりました。またわからないことがあったらお電話していいですか？」

「はい、お待ちしてますよ。」

「今日はありがとうございました。」

（ふー、疲れた）

でも、変わった会社だと思いませんか？いつから出勤するかは、かおりと相談しよう。しかし、変わった社長さんだ。小柄なのに、骨太なのかな？がっちり体型。なんとなく威圧感があるし、心から笑わない。感情のない人みたいだ。話し方も女性っぽい感じがない。

（もしかして、性同一性障害の人？）

とにかく、帰ってかおりに相談だ。勤務時間などは申し分ないんだけどな……。『歪な者』ってのが気にかかる。業務内容は、特に気にはならないけど、どうしようか。自分だけでは決められない

僕。

（かおりは、即決即断だからなあ。かおりに聞くのが1番だな）  
今日は疲れた。明日、またかおりと夕食でも食べながら相談しよう。明日は、キムチ鍋が食べたいな。

では、またお会いしましょう。

面接です（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。手違いがあつて、U  
Pが遅れましてすみませんでした。次回は、来月初旬を予定してい  
ます。寒くなりましたから、体調に気をつけてください。（かおり  
は喉が痛いようです）

### 第3話（前書き）

迷っていた僕を、かおりが後押ししてくれました。姉妹屋に入社します。

### 第3話

3、勤めることにしました

ども、山本です。キムチ鍋を囲んで、かおりと相談をしました。

キムチ鍋の具は、豚肉の薄切り、蕪、モヤシ、キャベツ、大根など、野菜の多いものでした。僕はモヤシが好きなので、知っているかおりは2袋もモヤシを用意していました。

「なあ、結構融通利く会社だったよ。時間の制限があまりなくて、ちよつと変わってるんだよ。」

「え？フレックスがなんとかって言ってたよね？」

「そう、コアタイムないんだよ。何でもいいから8時間仕事すればOKなんだってさ。」

「えゝ、なんか裏のありそうな仕事だね・・・。」

「そう思うよなあ。業務内容が変わってて、人助けっぽいんだよ。不登校児のお世話したりって言ってた。看護師が常駐らしいし。」

「ふゝん、そうなんだあ。」

かおり自身が、不登校児だった。いじめに遭って、高校のときはあまり学校に行ってなかったらしい。しかも、休むときは堂々と学校に電話して、担任に伝えていたようだ。先生とも衝突があったらしく、かおりのような物事に流されないタイプは大人から敬遠されていたに違いない。

「で？こうちゃん勤めたいんでしょ？そこに。」

「ああ。」

「じゃあ、行ってみれば？合わなければ辞めればいいじゃん。」

「そうだな、考えてばかりじゃ前に進めないのかもな・・・。」

「そうそう、玉砕覚悟？あははは。」

かおりは今日は珍しく笑っていた。普段は笑わないのに。僕の就職が決まることを喜んでくれている気がした。それは、勘の鋭いかお

りの独特のアンテナが反応して『姉妹屋商会』が僕の居場所となることを示唆していたのは、後になって気が付いた。

鍋の閉めはなぜかうどんではなくて、焼きそばの麺だったので、  
「ん？これおいしいの？」  
と聞いた。

「うん。友達に聞いたの。1回食べてみたくてさ、今日やってみたの。」

笑顔だ。かおりの笑顔、久しぶりに見る。こういう日が今より増えるといいのに。

翌日、『姉妹屋商会』に電話をした。僕は電話をかけるのが苦手  
で、毎回要点をメモに書き出し、それを傍らに話すのだ。

・勤務はいつからか

・初日は何時から入社すればいいのか

・服装

・他に持参するものなど

と、まあ、こんな具合です。電話がかかってくるのは平気なんですよ。

「あー、山本ですが・・・。」

「あー、こんにちわ、小山です。」

と、明るい声。

「そちらにお世話になることに決めましたので、よろしく願いますっ。」

「あらー、良かったわー。意外に早く決断なさったのね。」

「ええ、家族も賛成してくれたので・・・。」

家族とは、僕にとってはかおりだ。他に身内はいない、そう思っているから。

「えっと、いつから来てもらえるのかしら？」

「僕はいつからでも構いませんけど・・・。」

「まあ、頼もしい。明日からでもいいかしら？」

「はい。何時に出社すればいいですか？」

「そうねー、初日は9時でお願いできるかしら？」

「はい、午前9時ですね？」

「ええ、そうよ。」

「あー、服装なんですけど……。」

「あー、普段着でいいのよ。逆にスーツは禁止なの、うちは。」

「え？そうなんですか。」

「そうなのよ。私はたまたま制服っぽい服着てますけどね、ふふふ。」

「

あ、そうだった。小山さんはいかにも事務員って服装だった。2回とも、薄い茶色で、白のピンストラップのベストとスカートだった。

「わかりました。何か必要なものとかありますか？」

「そうねー、お財布は忘れないでね。ふふふ。」

「……。」

小山さんはお母さん口調になっていた。

「筆記用具もこちらにあるもので構わなければ、使ってもらえばいいし、お気に入りがあるのであれば、それを持ってきてくれればいいのよ。お昼ごはんはお弁当持ってこられる？」

「いえ、外食でと……。」

「もし好き嫌いのなかったら、いつも業者に頼んでいるからそれを利用してもいいのよ。」

「そうですか。わかりました。」

「あ、話が長くなりそうだから、明日また詳しくお話しますね。」

「はい、では明日9時に。」

「ふ〜。」

ため息が……。どつと疲れました。ほんの少しの会話なのに。このときの僕は、まだたったこれだけの話で息切れしてしまう、消極的というか人馴れしていない会話の下手な男でした。



### 第3話（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。毎年、この時期に体調を崩してしまつて遅くなつてすみませんでした。  
次回も約1カ月後を予定しております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7348c/>

---

姉妹屋商会

2010年10月8日22時11分発行